

この1年の歩み —昭和52年度— 村上英治

(1) この年文部省在外研究員として、約15年ぶりに、わずか2ヶ月の短期間ではあったけれども、海外出張の機会を得ることができた。たまたまこの年の春、国立特殊教育総合研究所が招いた、英国マンチェスター大学、Peter Mittler 教授の講演に、またセミナーに席を連ねて知遇を得たのをきっかけに、同教授との交際をつづけ、主たる affiliation の場として、同教授の、Hester Adrian 研究所に滞在することを許されたのは、私にとってきわめて幸いであった。わが国においても、昭和54年度からようやく実施の運びとなる、養護学校義務制の線に先がけて、71年から英国におけるその種の施策の推進役になったのが、ほかならぬ同教授であり、その指導のもとに実践的活動が精力的にすすめられているマンチェスターでの見聞をひろめ、さらに出来ることならば、具体的療育の現場に、私なりのオリエンテーションに従って、かかわりをもつことが許されるならばとの希望が、同教授の寛容あふれる御厚意にもとづき、ほぼ全面的にみたされることになったからである。

9月なかば、曾遊の地アメリカ合衆国、カルフォルニアを経て、ロンドン入りをして以来、秋深いマンチェスターですごした1ヶ月あまり、さらに復路はパリーを経て、印度バンガロールにも立ち寄った。たまたま開かれていた第3回アジア精神薄弱会議に合流する機を得たのも私にとってよいタイミングであったといえる。こうして11月なかば帰国するまでの2ヶ月間、海外の障害児療育に接して私なりに学んだものは多い。

帰朝してからの、教室での報告会の席上で語った一端は、随想的形式として2~3の雑文にも残してあるが、何よりも、この中で障害児者の権利が、人間として、等しく生きぬくために徹底的に守られねばならないといった、ある意味では当然の理念は、洋の東西を問わないものであることを、文字どおり肌で感ずることができたのは、私にとって意味深いし、また特に印度では、これらの障害児教育以前の問題があまりにも多く山積みしていることを、この眼で親しく見聞できたことも、やはり貴重な収穫であったといってよい。海外出張期間中、多大の御迷惑をおかけすることになったにもかかわらず、御援助と御理解を惜しまれなかった、学部教授会、さらに教室の教職員、大学院生、学部生各位に深い感謝の意を、この欄をかりて表するものである。

(2) ここ両3年、予告のみをつづけてきたようであったが、分裂病を生きぬく人びとの世界の構造化への寄与

をめざして、ロールシャッハ法をとおして重ねてきた検討は、ようやく52年8月、渡辺雄三、池田博和、細野純子との共著として、東京大学出版会から「ロールシャッハの現象学 — 分裂病者の世界 — 」として公刊される運びとなった。精神障害者への現象学的、人間学的接近をめざして、志同じうする仲間とともに、ささやかながら積み重ねてきた研究の1区切りとなったことを喜びながら、この志向性にそってのさらなる展開を期すべきものと考えた。

(3) そもそもこの種の投映法的接近とは、一般的日常的のレベルでは人間の理解、性格の診断と、いったいかなる点において、その差違があるものか、きわめて、初歩的な解説ではあるけれども、これを手がかりに、さらに興味をもつ人たちの探索へのみちびきをも意図して、「投映の世界」といった小論は、(昨年この歩みにも記したが)この年度当初4月に、教養部鈴木達也教授編になる誠信書房刊「心理学ゼミナール」のひとつの章としてかけられた。鈴木教授と僅かの期間ではあったが教養部で席を同じうしたのものとして、その御退官にあたって、御自愛を祈る所以である。

(4) 精神障害者と病院臨床の中で取り組みつづけて、もはや四半世紀を越える。障害を病み、障害を生きる人びとが、社会復帰への道を、力強くふみ出していくための一助をになうためにも、如上の投映法的接近をもあわせての治療実践を、個別的に深めることは当然であるが、その障害者たちをめぐる家族状況、さらにコミュニティのあり方は、その実践をすすめていく上での阻害をもたらすことがあまりにも多い。従来本紀要にも一連の報告を重ねてきた線にそって、障害者家族への接近をよりインテンシブにすすめることをめざして、「精神障害者の家族力動」と題する研究に、今年度東海学術奨励賞を得た。成果はなお、発表の段階に至ってはいないが、この年度行なった、同題の特殊講義の中に、私なりの方向性を示してきたつもりである。

(5) 心身障害者児へのかかわりの接近は、この年度また同様の実践を継時的に重ねてきている。コロニーでの研究実習については、人間学的接近(第10報)——人間としての生きざし——として、さらに臨床棟での母子通所形態での集団療育については、後藤秀爾を中心として、発達遅滞幼児の集団療育(その3)——集団への入りこみの悪さを主題にして——として共に本紀要にその実践記録、体験記録をもとにまとめられている。

(6) 学生相談活動としては、恒例の研究会議のシンポ

教育心理学教室教官の研究状況報告

ジウムが、今年度も53年1月、箱根において設けられた。その直前、前会長、久保良敏教授の急逝にあって、深い哀悼の意を表しつつ、急遽、その役割をになわされで第1のシンポジウム「進路相談をめぐって」で司会の労をとることになった。その経過は、東京大学でまとめられた、本会議報告に所載されている。さらにまた、

それに先立つ52年7月、蔵王で開かれた、本会議主催の、学生相談担当者のエンカウンター・グループへ、その前年度にひきつづき参加することによって、出会い体験を新たにし、私なりの自己開発を深めることが出来たのも、この年度の研究活動として忘れがたいものがある。
(昭和53年8月6日)

研究の課題と経過について 梶 田 正 巳

1. 学習型(様式)等の研究について

認知発達と学習型(様式)の関連性について、ここ数年、継続して研究をしてきた。本年も愛知教育大学助教授、中野靖彦氏と共同で前著「対連合学習における学習型の研究」(名古屋大学教育学部紀要 1977 24巻)を発展させるため、発達の視点から分析を試みた。研究の一部分は、本年度の日本心理学会42回大会(九州大学教育学部)において発表される予定である。今回の報告では幼稚園児から小学生に至る段階で、学習到達度の上、中、下位群によって、とられる学習型(様式)の異なることが示唆されており、論文として明確にくぎをつけておく必要を感じている。

次に昨年の暮れから、新たにスタートした「選択的注意」の研究について述べておきたい。注意についての問題意識は、今からおよそ10年余り前にさかのぼるが、Zeaman & House (1963)や Wycoff, Mackintoshらの観察反応理論、注意理論に触発された時から継続していた。幸い、関心を同じくする人々のグループが成立し、年始めに、偶発学習と成素選択のパラダイムを使った選択的注意の諸研究を展望することとなった。また、実験的研究も試みられた。これらの成果は、学習研究グループの Authorshipで「選択的注意の最近の研究—偶発学習と成素選択パラダイムの諸問題」、 「子どもの学習過程における選択的注意の研究」として

本紀要に公刊されることとなった。この研究領域を概観してみると、実に多くの問題が未開拓のまま残っているのがわかる。これらの問題を今後、掘り下げていく予定である。

2. 教授=学習過程の研究について

この問題は、あまりにも複雑で全く暗中模索の域を出ない。本学名誉教授の塩田芳久教授、杉江助手らとともに、学習指導研究会を一昨年から続けている。本会は、一口にいて、研究者が現場の先生方から問題提起を受けて考えたり、また、さまざまな実践的課題について学習する会となっている。この会の2年間は、筆者自身にとっても、実に捻りの多いものであった。その恩恵を受けて、Classroom learning, School learning についての構想がまとまりつつある。現在、数名の方々と研究会をもちながら、Classroom learning の稿を執筆しつつあるが、本年度中には、この段階における到達点を示すことができるものと思う。

なお、以上の研究の他にも、若干の研究活動をした。その主要なるものについて記す。

- 1) 北尾倫彦, 杉村健, 山内弘継, 梶田正巳 「教心理学」 有斐閣新書 1977, 11月 有斐閣
- 2) 「知識獲得と有意味学習」, 北尾倫彦編 「学習の心理—教科学習の基礎」 1978, 5月 ミネルヴァ書房